

「校長室便り『シンフォニー』」を発刊します。発刊の意図、それは、「あなたのハートに火を点けたい」ということです。あなた方には、無限の可能性がある。あなた方は、皆、将来の「大器」です。大器は必ず晩成します。早熟の大器などというものはありません。早熟で大器となったように見える方は、実は、早期の段階では熟してなどなく(大器とは言えず)、その後も努力し続けて、随分と年齢を重ねてから「大器」のレベルに達しました。達してみれば、やはり例外なく、「大器晩成」なのです。「本物」「一流」は晩成します。努力し続けなければなりません。「継続は力なり」。天才とは、「努力の天才」のことです。「やり抜く力」が必要です。「やり抜く力」は、「やり抜く」ことでしか身につけません。だから、私は、「あなたのハートに火を点けたい」。やり抜いて、やり抜いて、「大器」「一流」「本物」になっていただきたいのです。

「能力伸長・生田メソッド」という考え方を打ち出し、ホームページに掲載しました。「高い目標×文武両道・文理両道×自学自習×協働×ICT」この相乗効果で、「不確実で複雑な時代」を生き抜く「主体的な意志を持つ自立した『個』」を育成しようというのが、「能力伸長・生田メソッド」です。今後、このシンフォニーを通して発するメッセージは、ストレートに「能力伸長・生田メソッド」を語るもの、どこかで「能力伸長・生田メソッド」につながっていくもののいずれかです。いずれにしても私のメッセージの根底には「能力伸長・生田メソッド」があるわけです。

## 第一志望合格のためのゲームプラン

私はソフトテニス部の顧問でした。選手経験はありませんが、教員3年目の1985年4月から顧問となり、2001年3月までの16年間、顧問を務めました。(2001年4月からの勤務校にはソフトテニス部がなく、2008年4月に教頭になりました。)

そのソフトテニス部の指導で、「目から鱗」だったのが、ソフトテニスで華々しい選手実績のある他校顧問Aが言った「自分と闘うな。相手と戦え。」という言葉です。スポーツ(運動競技に限らない)には、大なり小なりゲーム性があります。ゲームとは「相手との戦い」です。囲碁・将棋・チェスのようにじわじわと相手を追いつめていきます。ですから、「じわじわと相手を追いつめ」ようにした柔道家・レスラーはゲームの実践者であり、ただただ自分とだけ闘っているテニスプレーヤーは、まるでゲームをしていないということになります。

勝つための厳しい練習は、「自分との闘い」です。競技本番の場面でも、実力を発揮するためには、「自分との闘い」が求められます。しかし、私は今まで、競技本番で、選手が自分とだけ闘って自滅していく場面を何度も見て来ました。競技中は、相手と戦わなければならない。「相手の弱点を攻める」「相手の長所を封じ込む」「自分の長所を最大限に発揮する」「自分の短所が目立たないようにする」。これがゲームです。「相手と戦う」「勝とうとする」「ゲームを楽しむ」とは、そういうことです。そのことに集中していれば、「自分とだけ闘って自滅する」なんてことはあり得ない。サーブが入らず、レシーブが入らず、ストロークが入らず、首を傾げる。こういう人は相手と戦っていない。相手と戦うのが怖くて、自滅の道を選択したということです。どんなに調子が悪くとも、競

技に勝ちたければ、ゲームを楽しみたければ、相手との戦いに集中します。だから、自滅などしません。

そこで、受験です。3年生、2年生、1年生、それぞれの残り時間、徹底的に勉強してください。「自分との闘い」です。そして、力をつけてください。模擬試験の偏差値。これのアップダウンは、「自分との闘い」です。勉強して、勉強して、点数を上げるしかない。受験本番（当日）も同じことです。他の受験生とは戦いようがありません。「自分と闘う」しかありません。

しかし、受験はゲームでもあります。相手は試験問題です。受験のゲーム性を無視してはいけません。受験とは、「出題傾向」と闘うゲームです。このゲームに参加せずして、「自分との闘い（偏差値）」に終始するのは、圧倒的な偏差値、お釣りの来る偏差値で合格するしかないということです。「出題傾向」と闘わないのは、試合放棄と言ってよいでしょう。

模擬試験は受験体力テストです。偏差値は、受験体力であり、志望校の問題傾向も配点も加味していません。実際の競技のルール（配点及び出題傾向）を無視して算出した受験体力（偏差値）です。模擬試験というのは、サッカー選手とバスケット選手が陸上競技で勝負しているようなものです。その結果がどうあれ、両者がサッカールールで勝負すればサッカー選手が勝ち、バスケットルールで勝負すればバスケット選手が勝ちます。当然の結果です。

個人の偏差値と個別大学の偏差値が同点だったときの合格率は50%です。10校受けて5校受かるという意味ではありません。10人受けて5人受かるということです。10校受けて1校も受からないかもしれない。50%とはそういうことです。「自分との闘い」だけでは、50%は50%以下にしかありません。50%を50%以上にするためには、「相手（出題傾向・配点）との戦い」に勝つ必要があります。相手（問題傾向・配点）をよく研究し、よく準備してください。（「天才とは、準備の天才のことである」）（もちろん、「相手との戦い」だけに終始しては駄目ですよ。それはそれで試合放棄ということになります。）

では、過去問をいつやるか。第一志望校と他の受験校（以下「併願校」という。）では、やる時期が違います。その違いは偏差値と関係しています。第一志望校の偏差値ランクは、あなたの偏差値に比してはるかに高い。しかし、併願校は偏差値と相談しながら決めるので50パーセント判定校も含んでいます。この併願校の合格可能性を高めるためにやるわけですから、併願校が決まらなければやりようはないということです。

しかし、第一志望校は偏差値無視で決めたはずですが。この第一志望校の合格可能性判定、ほとんどの現役生が最終模試段階で50%未満の判定です。それでも、合格する人は少なくありません。現役生は受験当日まで伸び続けます。本番が始まって、最終戦まで伸び続けます。この第一志望校の過去問をいつやるか。偏差値と相談していたら、やるタイミングを逃してしまいます。過去問をやらないまま寒い季節となり、もはややらざるを得ず、やってびっくり。そこには、第一志望校攻略のヒントが満載。「後悔先に立たず」ということです。

いつやるか。「2学年末以降速やかに。まずは1年分。」1年分やれば、覚悟が定まり、ハートに火がつき、ゲームプランも立ちます。残りの過去問をやる時期も自ずと定まるでしょう。**3年生、さあ、第一志望校の過去問をやろう。**

（あらゆる受験生の中で、最も過去問を疎かにしているのは大学受験生です。皆さんは、過去問を攻略して（受験のゲーム性を味方にして）、栄冠を勝ち取ってください。）